

◎八月廿一日

①阿弥陀経：浄土三部経（+「無量寿経」「観無量寿経」）の一つ。阿弥陀の極楽浄土のすがたをたたえ、この仏の名を称えて、その浄土に往生することを勧めた経典。浄土三部経は浄土宗・真宗の根本経典として用いる。

②和讃：仏法あるいは仏の徳などを讃える七五調の歌。親鸞は五〇〇首以上の和讃を残し、中でも「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」は「三帖和讃」と総称され、親鸞の宗教的感情が豊かに表現された作品として知られている。（浄土真宗本願寺派総合研究所のホームページより）

③文章：本願寺第八代蓮如が製作した手紙（消息）。平易な言葉で浄土真宗の教えを説き示し、全国各地の門弟たちに送り届けた。その数は二〇〇通を越える。第九代実如の頃、全国各地に散らばる「御文章」の中から八〇通をまとめた、五帖八十通の『御文章』が完成する。現在の『御文章』もこれに当たる。さらに実如は、朝夕の勤行後に『御文章』の拝読を推奨した。現在でも本願寺派では日常勤行として、正信偈和讃の後、『御文章』を拝読するのが基本であると定めている。

④鬼灯（ほおずき、酸漿）：ナス科の多年草。ふつう観賞用に人家に栽培される。（中略）果実は球形で、袋状の萼（がく）に包まれて赤く熟す。子どもが趣旨を除いた果実の皮を口に含んで鳴らして遊ぶ。根は鎮咳・利尿薬に使う。

⑤苞（つと）豆ふ：豆腐の水をよくしぼり、甘酒を搾りまぜて棒状にし、竹箆（たす）で巻いて、蒸し、小口切りにする。

*木綿豆腐を用いる。
『現代語訳「豆腐百珍」』（何必 醇著、福田浩訳、中公文庫）

⑥唐漬：？ 辛漬であれば、京都では沢庵漬のこと。

⑦飛龍頭（ひりゅうず）：①粳米（うるちまい）と糯米（もちこめ）の粉を等分に



芸園温室（京都市）の紫蘇の花（蘇葉）
（京都市農業協同組合）

混合し、水で練り合わせてから茹でたものを油で揚げた食品。②がんとときを関西でいう。

⑧京菜：アブラナ科の一年草または二年草。カブと同種の野菜で、京都地方で古くから栽培され、各地に広まった。晩夏に蒔き冬に収穫する。味が淡白で香りがあり、漬物・鍋物などにする。水菜、千筋水菜。

⑨台引：①宴会の膳などに敷く紙。②台引物の略。膳に添えて出す酒肴や菓子で、台にのせて主人が持ち出し、台から取って客にすすめ、また客に持ち帰らせるもの。

⑩琉球芋：薩摩芋の異称。

⑪衣揚：天ぷら。刻んだ野菜などの入子がない揚げもの。うどん粉などを水で溶いて材料などに付着させて揚げたもの。

⑫紫蘇穂：種子の熟した果実を密に着けた紫蘇の花穂を秋に摘み、そのまま吸豊桶い口や和え物にするほか、佃煮、塩煎り、塩漬けなどとして保存食品とする。

⑬葛醬油：醬油を煮たてた中に、葛粉の溶いたのを混ぜて煮た汁。

⑭硯蓋：祝いなどの席で、口取り肴などを盛る盆状の容器。もとは硯箱の蓋を用いたところからついた。

⑮帯番椒：「番椒（ばんしょう）」は植物「とうがらし」の漢名。

⑯しんじよ（糝薯・真薯など）：白身魚のすり身に、おろしたやまのいも、または卵白をすり混ぜ、調味して形を整え、蒸したり煮たりして凝固させたもの。すり身の材料として鴨などの鳥を用いるものもあり、また豆腐を吸って加えるものもある。糝薯の名は、糝は、ねばるといふ意から、薯は薯蕷（とうろ）を用いるからという。糝薯は加える材料や形によつて、芋糝薯、鱧（はも）糝薯、鯛糝薯、海老糝薯、角（かく）糝薯、鹿子糝薯、その他の種類がある。

⑰葛たまり（葛溜）：葛餡のこと。水で溶いた葛粉を、しょうゆ・砂糖などを九合えた煮出し汁に入れ、とろ火で熱したもの。魚肉・うどんなどにかけて食べる。

⑱青和会：青豆をすりつぶし塩かげんをしたもの、あるいは酒粕やみそに青寄せを加えて作る緑色の和衣で、魚介類などを和えたもの。酢を加えたものは着んた膾という。

⑱薯蕷：植物「ながいも」の漢名。

⑳寒具：寒食（古く中国で、冬至から一〇五日間は風雨の烈しい日として、火絶ちをして、煮炊きしないで物を食べた風習）のときに食べる菓子。糰餅（まがりもち、米麦の粉を練り、細く紐状にして、輪にしたり種々の形に曲げたりして、油で揚げた菓子）の類の唐菓子（からくだもの、粳米うるちこめ）の粉・小麦粉に甘葛の液を入れてこね、種々の形に作って胡麻油で揚げた菓子。

㉑さし身：さしみは、なます（獣肉や魚介類を生そのままで細かく刻み、それを酢で食べる）の一種として室町時代から作られるようになった。なますより厚く切り、調味料を添えて供する（語源は、切るを忌みて刺すとか、何の魚かわかるようにその魚のひれを刺しておくとか、諸説あり）。さしみの材料はおもに魚類であるが、『料理物語』には、鴨・雉子・鶏などの鳥類、椎茸・きくらげなどの茸類がさしみの材料にあげられている。さらに青物の部では、麩・豆腐・蒟蒻・みょうが・たんぽぽの花・よめな・苺（ちしや）：など、現在の野菜のほか、大豆製品・こんにやく・花などもふくまれている。ここのでいう「さしみ」は、生またはゆでた材料に調味料（当時醤油は高価なので、煎酒・蓼酢・山葵酢・生姜酢・辛子酢・山椒味噌酢・酢味噌などが用いられた。

松下幸子『図説江戸料理事典』（柏書房）

㉒紫苑：キク科シオン属の多年草。

㉓乙切草（弟切草）：オトギリソウ科オトギリソウ属の多年草。

◎八月廿四日

㉔能称廟：村上天五代藤次郎（一七八八〜一八〇八）。法名は文久二年（一八六二）一月の文字増により能称院応誓証真居士となった。文化五年（一八〇八）八月二十四日死去。



オトギリソウ（ウイキペディア）



シオンの花（ウイキペディア）

㉕点心：①正午の昼食の前に一時の空腹をいやすための少量の食事。転じて。全集中は昼食の意に用いる。②中国料理で、軽食風の料理や菓子。転じて、茶うけの菓子。茶の子。

◎八月廿五日

㉖帰寧：（「寧」は安んじるの意）嫁入りした女性が里帰りすること。転じて、親と離れて生活している女性が親元に短期間戻ることという。帰省。

◎八月廿七日

㉗中島右馬助：広島藩士。天保十年（一八四二）に代官。

㉘中島達吉：広島藩士。嘉永六年（一八五三）八月父右馬介家督、元治元年（一八六四）目付、明治元年（一八六八）五月当時「役人帖」では奥小姓（紀伊守 長敷付）、一〇五石。明治二年目付。

㉙石田富衛：石田家は甲州時代より十右衛門某が浅野幸長に仕官して以来広島藩士。文化四年（一八〇七）当時の当主は富衛。

㉚石田万之丞：広島藩士。嘉永六年（一八五三）八月父富衛家督、嘉永七年「官禄帖」では中小姓頭取（片岡大記組）二〇石。慶応三年（一八六七）新組頭添役、「役人帖」（明治元年五月）では中小姓頭取・新組頭添役、二〇石三人扶持。

◎八月廿六日

㉛増田平大夫：広島藩士。天保八年（一八三七）目付、天保十年青山内証分家用達役、嘉永三年（一八五〇）大目附、嘉永六年用人。

㉜安井勇之丞：広島藩士。天保十年（一八三九）奥詰、同年奥小姓、弘化五年（一八四八）步行頭次席、嘉永四年（一八五二）騎馬弓筒頭、嘉永七年（一八五四）大小姓頭

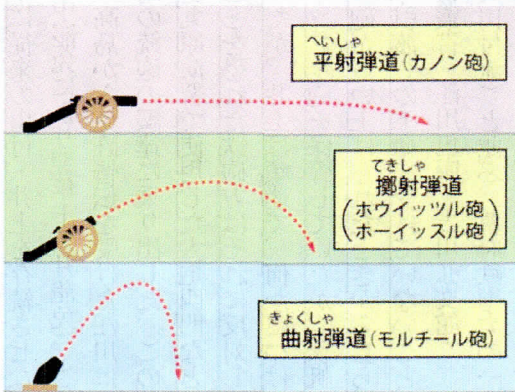
㉝玉置貢：嘉永四年（一八五二）鎗奉行、嘉永五年先手者頭次席、安政二年（一八五五）步行頭次席、安政三年青山内証分家用達役、文久二年（一八六二）側詰次席、「役人帖」（明治元年五月）では側者頭添役次席、二二五石、明治元年武器奉行、同年步行頭次席

◎八月卅日

㉞井上権之丞：広島藩士。外記流（井上流）砲術師範。三月五日（参考資料6）既出

③⑤ テンセイ筒：「テンセイ筒」は、小鷹狩元凱「芸藩二十三年録」(元凱十著)に、次のような説明があるだけで、他の記録には探せなかった。

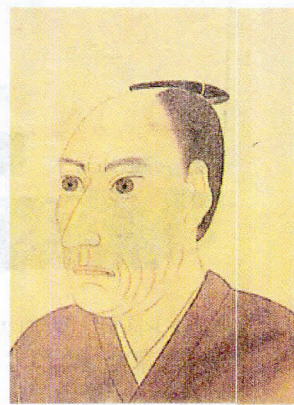
執政等時或は事情に逼迫しては銃砲の備へ施さざるを得ず、藩砲術の師範両家あり、一を井上権之丞と云ひ、外記流と号し藩主の師なり、一を奥弥衛門と云ひ、自由齋流と号す、弥衛門早く泰西(たいせい、西洋)の軍法を学び、之が銃砲の製に遵(したが)はざる可からざることを知れば、乃ち身自ら周防岩国の臣有阪淳蔵が彼国の砲術に精蘊(せいこん)を細かく考察すること)なるを聞き、其家に就て専ら大砲射撃及び鑄造の法を修練し、隊伍編制・操銃運動のことは江戸に至り、幕臣下曾禰金三郎の門に入り之を伝授し、帰国後其門人に教授を為す、又官に請求して小銃大砲を購入し、軍備拡張の実を挙げんと欲すと雖も、阻障(そしょう、さまざまの事)を生ずること寡(すくな)しとせず、権之丞は洋法を忌み、泰西の術尽く信ず可からずとて曰く、幕府砲術師範井上某(左大夫ならん)は我宗家なり、宗家近時鑄造に係る製(此名何の故たるや未だ詳知せず、或は想ふ、泰西の迦農砲を転じ、従来の火器と折衷して製造せりとの義ならんか、転製砲後年遂に無用と為る)と称する大砲は遠距離の狙撃に便にして、如何なる石壁・鉄艦も之を摧破(さいは)は、くだきやぶること)するや難きに非ず、且費途も亦自国の製に係れば巨額を要せざるや言を待たざるなり」と、而して両家主張する所の大砲を試撃するに際し、各家に附属する騎馬筒其他門人等、奥派は事皆戦時に擬(ぎ)し(見立てること)、動作より衣装に至るまで、当時の俗眼より之を評すれば過激の名を免るゝこと能はずと雖も、井上派は之に反し威儀正しく、動止も亦人目に触ること無ければ、其温順を賞せらる。(後略)



砲術の世界では弾道によって大砲を分類し、①カノン砲(弾道がほぼ水平)、②臼砲(弾道が高い)、③榴弾砲(カノン砲と臼砲の中間くらいの弾道、ホーウィッツアー砲)の三つに分けられる。十八世紀のカノン砲はその射程距離は一・六キロメートルであった。(中江秀雄『日本の大砲とその歴史』、雄山閣、図は「幕末に使われた大砲の種類/ホームメイド」)

③⑥ 紅毛人：オランダ人。ポルトガル人・スペイン人を南蛮人と呼んだのを区別して言った。のち広く欧米人を言った。

③⑦ 江川太郎左衛門：幕臣で兵学家。名は英龍(ひでたつ、一八〇一〜五五)。号は坦庵。天保六年(一八三五)に父親の病死により、駿河・伊豆・甲斐・武蔵・相模に十〇万石余の支配地を有する葦山(静岡岡伊豆の国市葦山町)代官となる。海防の充実を痛感して幕府へ建言、幕府から海岸巡視を命ぜられ、渡辺崋山らの洋学者の力を借りて沿岸測量に当り、優れた実績を挙げたが、蛮社の獄を招く。同十二年高島秋帆の門に入り、高島流砲術を関東に広めた。同十四年鉄砲方兼帯を命ぜられ、以後葦山に小型反射炉試作や、農兵策・国防等を建言して老中阿部正弘に認められ、嘉永六年六月ペリー来航の際に勘定吟味役に進み、海防の權威として品川砲台築造・反射炉築造(葦山)・大砲鑄造(本郷湯島)・様式造船等の取立掛となり、また農兵の組織化を試みるなど、文字通り東奔西走した。



江川英龍自画像(ウイキペディア)

* 江川は日本で初めて西洋式軍隊を組織したとされる。「気をつけ」「右向け右」「回れ右」といった号令・掛け声は、その時に英龍が一般の者が使いやすいように、親族に頼んで西洋の文献から日本語に訳させたもの(ウイキペディア)。自ら洋書を翻訳できたかは疑問。江川が鉄砲方に任じられたこともあり、井上は何かにつけことごとく対立、井上は洋式嫌いで有名。江川の翻訳を下げられて研究し、大砲を製造するとは考えにくい

高島秋帆による洋式砲術演習が徳丸原において行われ、世上で好評を博したが、蘭字嫌いの鳥居耀蔵と、幕府鉄砲方の田付四郎兵衛と井上左太夫は酷評した。江川はこれに対し、その内容を逐一弁駁して、井上を沈黙させた。高島流砲

術に関心を持った水野忠邦は、天保十四年に従来の田付・井上を存続させながらも、江川を鉄砲方に登用した（水野の老中罷免により翌年十二月罷免。これは砲術の主流が洋式に移ったことを示す。高島から免許皆伝を受けた江川は、将来は銃砲の国産化を図るつもりで調練用の銃砲の調達に乗り出した。このため天保十二年九月に、幕府が買い上げた徳丸原演習で使用した大砲四門などの借用を願い出た。その存在を脅かされることを恐れた鉄砲方はそれに反対し、難航した。田付は比較的温厚な人物であったが、井上は頑迷で、何かにつけ江川の動きを封じようとした。井上はホイッスル砲を保管していたが、秋帆の砲術を罵倒しながらも内心はそれを恐れ、砲が買い上げられたときから自ら試射したかった。このため鉄砲方の未試射や引渡しの下命を受けていないことを理由に拒絶した。

（仲田正之『人物叢書 江川坦庵』吉川弘文館）

38 井上左大夫流（外記流）…田付四郎兵衛（田付流）と並ぶ、幕府鉄砲方の一人（井上流・外記流）。井上流は、井上外記正継が創始した砲術の一流派。井上正継は二代將軍徳川秀次から鉄砲方に任じられ、従来の大筒の1割の軽量で、三貫目の弾を四〇町も飛ばす新型の大筒一〇〇余挺製作した。

39 清国広東二戦…太平天国の乱。広東の客家（はつか、中国南部の広東省・福建省・江西省などで華北を北方系の遊牧民に征服された北宋の頃、南に移住した漢民族の子孫と言われている）農民の子、洪秀全（一八一四〜一八四四）がキリスト教の影響下に創始された一神教拜上帝教を信奉する拜上帝会が、地上天国の樹立をめざして一八五〇年十二月に広東東莞金田村で蜂起、一八五一年閏八月に、北の永安を攻略して、最初の拠点とした。

***洪秀全**は明の皇帝朱氏の子孫ではないが、正統なる漢人の末裔という自己認識を持ち、みずからを「選ばれし者」と確信した。生まれは広州郊外花県の官禄

【土布】（かんろく心）村。

このとき太平天国の建国を宣言し、洪秀全を天王とした。一八五二年二月に永安を放棄した太平軍は、追撃する清軍に反撃をくわえつつ北上し、桂林の包圍と攻撃を開始した。だが猛攻もむなしく、桂林は攻略できず、矛先をさらに北にむけ、四月に全州をおとし入れた。勝ちにのった太平軍は湖南省に進出し、五月には道州を攻略した。ついで江華、永明の各県をおとし、八月には湖南の

菊池秀明『太平天国―皇帝なき中国の挫折』（岩波新書）ほか

要衝である長沙を包圍攻撃するにいたった。しかし、大軍をもつてした長沙の攻撃は二ヵ月におよんでも成功せず、十一月末に長沙の包圍を解き、途中数百隻の船を入手して、洞庭湖の東岸を水陸に分かれて北上、長沙に兵力を集中させていた清軍はこの変化に対応できず、湖南東北部の要衝である岳陽が陥落した。十二月下旬に漢陽、五三年一月には武昌、三月には南京を占領した。

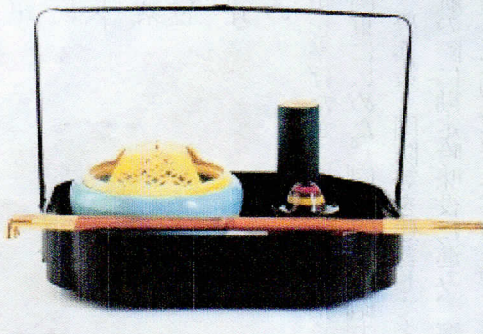
40 丹那浦松ヶ窪：不明

41 灰吹：①タバコ盆についていて、タバコの吸がらを吹き落としたり、たたき入れたりする筒。多くは竹製。

42 煙管：管の一端に刻みタバコをつめて火をつけ、他端の吸口からその煙を吸う道具。両端が金属、途中が竹でできているものが多い。

参考資料21訂正

6 於留殿（於儀殿）…東城浅野家先代周防道博の娘。嘉永六年六月二十八日に誕生。生母は老女並たつ。八月八日に於儀、安政元年十二月十五日に於時と改名、安政二年五月十八日死去。



煙草盆と灰吹（右奥の竹筒）、煙管（手前）（煙草盆（たばこぼん））



「太平軍進撃路地図（1）一益陽から南京までは船による快進撃」（ホームページ「太平天国の怒り」）

***** 萬津箱 ***** (余談です) *****

料理について

本膳料理…武家がお客をもてなすための膳に載せた料理(現在は殆ど見かけません)
懐石料理…茶会で提供される軽い料理
会席料理…現代における宴会料理

本膳料理の形式

料理が出る前に、まず式三献という作法による儀式的な酒宴があります。
式三献とは、年代や流派によって違いがありますが、一例をあげますと、初献に雑煮、二献に鰻頭、三献に吸い物といった肴で杯をあげます。非常に儀式的で、現在の三々九度がこのときの名残だといわれています。
式三献という酒の部が終わると料理が出てきます。

本膳料理の基本、一汁三菜

- 一の膳(本膳) ご飯、汁物、香の物、平※、なます
- 二の膳(焼物膳) 焼物※ (香の物は三菜に含めない)

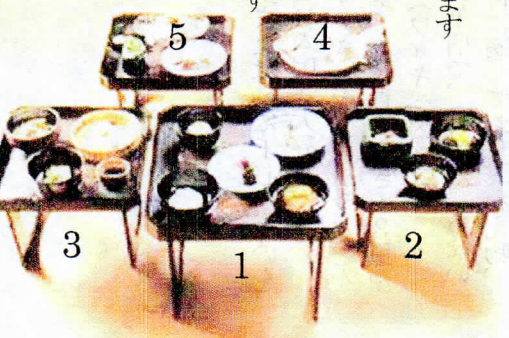
宴席の規模により、本膳(一の膳)のみから二の膳、三の膳と膳の数が増えるに従い、二汁五菜、三汁七菜と増えていきます。

二汁五菜の献立

- 一の膳(本膳) ご飯、汁物、香の物、坪※、なます
- 二の膳 猪口※(ちよく)、汁物、平
- 三の膳 焼物

武家の儀式料理「本膳料理」の最高級、三汁七菜の献立

- 一の膳(本膳) ご飯、汁物、香の物、坪、なます
- 二の膳 猪口(ちよく)、汁物、平
- 三の膳 汁物、小付※、お造り
- 与の膳 焼物
- 五の膳 台引物※



※平 平椀に盛る煮物。

※坪 かぶせ蓋がついた器のことで、煮物や和え物が盛られる。(二の膳にも煮物が乗る場合、本膳に乗る煮物を坪と呼び二の膳に乗る煮物を平と呼ぶ。)

※猪口 酢の物 和え物など、小さな器に盛る料理。

※小付 酒の肴や珍味を小皿に盛ったもの。

※焼物 焼き魚等。箸をつけず、折詰にして持ち帰るのが作法。

※台引物 客への土産として、膳部に添えて出す肴・菓子の類。

蒲鉾や金とん、羊かん、伊達巻など少し甘めのものが多い。(引出物はここからきている)

(以上仕出し割烹しげよしHP、小林食品(株)HP等引用)

家乗の頭書に度々記される祥月法要の献膳・献菓子、献立は精進料理の一汁三菜(ルーツは本膳料理)のようです。精進料理ですから三献五董を避けます。

(三献とは肉・魚・卵などの動物性の食材、五董とはニンニク、タマネギ、ネギ、ニラ、ラッキョウといった辛味や香りの強い食材です。)

それゆえ焼物(焼魚)の代わりに御平となっているのかもしれませんが。(個人の推量)

(家乗で回忌法要の献立は凡そ八月廿一日のものに準じており、右頭書のもとは大分異なります。精進のようですが酒も出ています。本膳料理とは形式が違います。中酒の後は酒の肴でしょうか?)

信仰心の薄い私は知らなかったのですが、初七日から四十九日、百廿日、祥月命日、法事、春秋のお彼岸などには御霊供膳(精進料理の一汁三菜。但し香の物も三菜に数える)なるものをお供えするのだそうです。信心深い方は今でも続けて居られるようです。可愛い小さなお膳に、料理を盛りつけお供えします。親碗飯・汁碗・平碗・壺碗・高坏(香の物)——配置は宗派、地域により異なりますが、浄土真宗では故人は浄土で仏となると考えて居り、御霊供膳や位牌を用いようです。(西向寺・徳了寺は浄土真宗、妙慶院は浄土宗)

家乗の献膳も現代のそれのように小型の御膳で仏壇にお供えしたのでしょうか。それとも本当の御膳でお供えしたのでしょうか。あとでお下がりを頂いたのでしょうか……?

アレツ、西向寺は浄土真宗……献膳?? 風習が変わったのでしょうか?

ネット検索だけでは分からぬ事が増え、

反って疑問が残ります。



御霊供膳

令和七年三月例会資料（二月分後追）

家乗嘉永六年 八月三日～八月十五日

一、先月の解説文活字読みの確認点 なし

二、指摘・意見・質問・他

○ 八月九日頭書『白いも茎』

「いも茎」は「芋茎」ではないでしょうか。

ずいき【芋茎・芋苗】『名詞』(語源未詳)

① サトイモ類の茎。黒みを帯びた赤紫色で、生または日に干したものを

食用にする。いもから。(日本国語大辞典)

ずいきⅡヤツガシラ(里芋)などの赤い茎である赤ずいき、ヤツガシラなどを

軟白栽培した白ずいき(白ダツ)、ハスイモの茎である青ずいきの3種類

に分けられる。(ウイキペディア)

白ズイキ(白ダツ) 白ずいきは海老芋や祖芋などの葉柄で、日が当たらない

よう軟白栽培する。えぐみがなくて淡泊な味付に適しており、和え物、

酢の物、煮物などにしてシャキシャキとした食感と淡麗な味を楽しむ。

(MBS 毎日放送・京都知新)

「白いも茎」Ⅱ「白芋茎」Ⅱ「白ズイキ(ダツ)」だとおもいます。

イモのあれこれ

● ジャガイモは江戸初期には伝来していたが、サツマイモが急速に広まったのに対し当初飼料として纒に利用される程度で、天明の飢饉後救荒作物として次第に普及はしたが、広く使われだしたのは明治に入ってからである。(日本調理学大)

● 江戸時代を通じて単に「いも」と云えば里芋のことを言った。「芋の子を洗う」と云うのも里芋のことである。水を張った桶に里芋を隙間なく入れ、棒や板でかき

まわして洗う様子で混雑した様子を形容している。(小学館・ことばのまじ)

● 因に「じゃがいも」や「里芋」・「キクイモ」は茎の変化したものの。「さつまいも」は根が芋になっている。「山芋」・「長芋」はその中間の説がある。(Wiki)

○ 八月十三日『有微蒸氣』の読み

辞書では、び【微】[音]ピ[漢]ミ[吳]「訓」かすか(大辞泉)ですが、ふりがな文庫では、(かすか)(び)(すこし)(ひそか)(わずか)など読みの例があります。

「わずか(かすか)にじょうきあり」ではないでしょうか?

○ 於儀殿 於房殿

「殿」の字は、楷書体から崩しが大きくなるほど敬意が薄いとされています。

殿殿殿殿殿殿

↑ 崩し方順になっているかは、分からない

於儀殿は周防様の子、於房殿は出衛様の子と云うことで文字に差を付けているのでしょうか? 字体・書体で格付けしたり、「奥向ニ而者様唱」等と敬称を表と奥で使い分けたり、ややこしいことです。(様)の方が格上) その「様」の字も崩しの大小で格を表しますが、その前に「永様」「次様」「水様」の順に格付けされます。

様様様様様

仮名よりは漢字を、漢字でも崩し字よりは楷書体を、楷書体でも略字体よりは正字体をという、より本来性の高いもの、厳密なものを上位とみる意識が見えます。(参考…三省堂編集部によることばの壺・他)

三、報告・お知らせ

◇ 本日例会後全体会を行います。

そのあと、役員引継ぎ・会費等の検討をいたしたいと思いますので、

現役員、及び次期役員並びに次期班長はお残り下さい。

なるべく短時間で終わらせたいと思いますので宜しくお願い致します。

◇ 次例会は、四月十二日(第2土曜日)午後一時半です。於第一・第二研修室

当日の会場当番は、A8班及びB1班です。

五月例会は、五月十日(第2土曜日)、

六月例会は、六月七日(第1土曜日)、

七月 例会は、七月五日(第1土曜日)

九月例会は、九月六日(第1土曜日)です。

◇ 四月は席移動月です。席移動をお願いします。班単位で今回より1つ宛前にお進み下さい。一番前の班は最後列へお廻りください

広島市西区田方の海蔵寺(曹洞宗)

村上彦右衛門が城下から度々徒歩で参詣した東城浅野家の菩提寺・海蔵寺。2013年3月14日、古文書解読同好会の第2グループ有志7名が境内を探訪した。墓碑は五輪塔で、第10代浅野孫左衛門高平のみ円墳状の墓碑である。第11代の浅野孫左衛門道博墓には、村上彦右衛門・渡辺雅登・堀尾善太夫・佐藤益之丞などお馴染みの面々が石燈籠を奉獻していた。



鐘楼門
(文政9年再建、被爆建物)



海蔵寺本堂
(天保11年再建、被爆建物)



初代 浅野内蔵允高英墓
(涼臺院、寛文8年建之)



第3代 浅野伊織高尚墓
(晋照院)



第5代 浅野河内俊峰墓
(大了院)



第6代 浅野豊前高明墓
(海嶽院)



奉獻
村上星右衛門



第10代 浅野孫左衛門高平墳墓(建徳院・天保12年建之)。村上星右衛門が石燈籠を奉獻。石燈籠の竿に刻字。



奉獻
村上彦右衛門

第11代 浅野孫左衛門道博墓(澄源院)。村上彦右衛門・渡辺雅登・堀尾善太夫、佐藤益之丞が石燈籠を奉獻。竿に刻字。

表4—10 東城浅野家歴代当主一覽

代	名 前	当 主 年 月	備考(続柄・前名・隱居名・法号など)
1	浅野内蔵允高英	元和 5(1619). ~寛文 4(1664).12	三郎, 摂津守, 若狭守, 越前守, 幽山, 涼台院
2	浅野孫左衛門高次	寛文 4(1664).12~延宝 7(1679).10	高英子, 三郎, 高光, 臨調院
3	浅野伊織高尚	延宝 7(1679).12~元禄15(1702). 3	高次子, 孫助, 晋照院
4	浅野豊前高方	元禄15(1702). 8~享保10(1725). 5	浅野綱長七男, 吉三郎, 継善, 樹功院
5	浅野河内俊峰	享保10(1725). 7~宝暦 4(1754). 7	高方子, 隼之進, 越前, 大了院
6	浅野豊前高明	宝暦 4(1754). 9~明和 2(1765). 9	俊峰長男, 三郎, 海嶽院
7	浅野若狭道寧	明和 2(1765).11~天明 6(1786).11	俊峰二男, 権五郎, 高富, 近江, 龍泉院
8	浅野讚岐高景	天明 7(1787). 2~享和元(1801). 2	浅野忠綏男, 陳忠, 雅貴, 越前, 景德院
9	浅野虎人高通	享和元(1801). 4~文化 4(1807). 6	幽篁院
10	浅野孫左衛門高平	文化 4(1807). 9~文化12(1815). 8	龜吉, 信濃, 建徳院
11	浅野孫左衛門道博	文化12(1815). 8~嘉永元(1848). 8	堀田(宮川)正毅二男, 亮之助, 周防, 駿河, 正博, 高博
12	浅野河内道興	嘉永元(1848). 8~明治 2(1869). 7	高平長男, 大炊, 豊後, 勅典
13	浅野守之進道敏	明治 2(1869). 7~明治 2(1869). 8	浅野懋績六男, 守夫

『東城町史(原始・古代・中世・近世・自然環境)』、発行 H11. 1. 5